

「神さまがいるのなら、なぜ、ハンディキャップがある子が生まれてくるのだろうか?」。以前お話ししましたが、わたしは34年間の教員生活のうち約7割の期間、ハンディがある中高生が通う学校に勤務しました。冒頭の問いは、その間ずっと考えていた問いでした。きょうはこの問題について考えていきましょう。

## 🔑 神さま、なぜあなたが創った世界に「悪」があるのですか? (2)

### 再会

教員時代、ハンディキャップがあるお子さんをもつ保護者の方に接していると、「なぜ、うちの子が…」という、やりきれなさを多少抱いている方と、生き活きとして積極的に学校の教育活動にかかわっていただき、お子さんに対しては「私たちはこの子からいろいろなことを学んでいます」という受けとめをなさっている方がいらっしやいました。この「ちがい」は、いったいどこからきているのだろうといつも思っていました。そこで今回、「この疑問に答えていただけるのはこの人たちしかいない」と考えた保護者の方にお話をお聞きしたいとお願いしたところ、快く応じていただけました。お二人は、わたしが市内の中学校で知的・言語・聴力にハンディがあるクラスを担当していたときに会った保護者の方々です。いつお会いしても、お子さんを見つめるまなざしのやさしさ、ゆたかさ、思いやりの深さを感じていました。夕食をともにしながらのインタビューは、再会の喜びとなつかしさに包まれて、とても楽しく充実したものになりました。3時間半あまりの時間はあっという間に流れました。重苦しい雰囲気になることもあるのではと思っていたのですが、ところがどっこい。笑いも交じりあい、あたたかさに包まれた中でお話を伺えたことに心から感謝しています。

インタビューにあたり、二つのプリントを用意しました。ひとつは『伊藤隆二著作集2 愛と幸福と教育と』の中にある『人を理解するということ』という文です。伊藤隆二先生(1932-、教育心理学者、横浜市立大学名誉教授)の本を読んだのは、言語・難聴指導に携わってから数か月後のことでした。太田市の「ことばの教室」に出張したとき、何気なく手にとった『なぜ この子らは世の光なりか』という本を読み、その内容に圧倒されました。伊藤先生はクリスチャン(宗派は不明)ですが、仏教用語の「同行二人」(信者や修行者が巡礼するとき、笠に書く文字。弘法大師と二人連れの意)から採ったと思われる〈同行教育〉という教育を提唱しています。先生の著書によって、ハンディキャップがある子供たちに対する教員としての、いや、人間としての在り方を教えていただきました。まさに「目から鱗が落ちる」思いで読みました。言語・難聴指導はゼロからのスタートだったので、マニュアル通りの指導しか行わず(「できず」と言った方が正確です)、やり甲斐をあまり感じていなかった自分がこの本を読んでから、大瀬康一演ずる祝十郎が「月光仮面」に変身したように(古いですがね! 1958年から始まったテレビドラマ、のちに映画化。当時わたしは8歳。)、ハンディがある生徒たちと「共に歩める」自分になろうという意識をもって取り組めるようになりました。

『人を理解するということ』に書かれているパール・バック氏(Pearl Sydensticker Buck 1892-1973)ノーベル文学賞受賞。著書に『大地』など)の文を読んでみましょう。少し長いので要約します。

## 世界的文学者の母に、知的ハンディがある娘さんが教えてくれたこと

バック氏に赤ちゃんが生まれました。『めずらしいほどの美しさをもった、利発そうな光をたたえた目をしている』女の子でした。しかし、10歳になっても話ができません。医師から「望みを捨てて、真理を受け入れなければなりません。この子は正確にしゃべれるようにはなりません。また、読み書きはできるようにはならないでしょう」と言われました。娘さんは「フェノールケトン尿症」という身体の未発達に加え、知的に重いハンディキャップを伴う病気だったのです。それを聞いたとき『身体の中で絶望的に血が流れだすような感じだった』とバック氏は書いています。あきらめきれなかった彼女は娘さんに対して、熱心に、そしてきびしく、手をとって文字を書かせようとなりました。あるとき、自分の手を娘さんの右手に重ねたら、その手は汗でびっしょりだったといいます。右手だけではなく、左手も同じでした。このとき彼女は、『娘がわたしを喜ばせようとする天使のような気持ちから、ただわたしのために、非常に緊張しながら、自分では何もわからないことに一生けんめいになっていたことを知った。娘は、ほんとうはなに一つ学んでいなかった』ことを知ったのです。そして、『自分の胸が押しつぶされるように感じ』、家の中の本すべてを娘さんの目に触れさせないように遠ざけたといいます。

そして『この可憐な魂に無理をさせて、できないことをさせて、いったい何の役に立っているのか…』と自分に問いかけました。もっとがんばれば少しは読めるように、名前ぐらいは書けるようになったかもしれないけれど、「本を楽しむこと」や「自分の意思を伝える手段として文字が書けること」はなかっただろうと書いています。だれでも「幸福になる権利」をもっています。バック氏は、この子にとって幸福とは『彼女ができる範囲内で、生活することができるということ』と考えました。そして『わたしは娘にたいするすべての野心も、またすべてのプライドも捨て去り、そして彼女のあるがままをそのまま受け入れ、それ以上のことはいっさい期待しまいと心に誓った』とつづけています。

そして、『わたしは歩まなくてはならなかった最も悲しみに満ちた行路をすすむ間に、人のところはすべて尊敬するに値することを知ったのであります。すべての人は人間として平等であり、同じ権利をもっていることを教えてくれたのは、ほかならぬ私の娘でありました。もしわたしがこれを理解する機会に恵まれなかったら、自分より能力のない人に我慢できない傲慢な態度をもちつけていたにちがいありません。娘はわたしに、人間とは何であるかということを知らせてくれた』と述懐しています。

### 「なぜ、わたしの子が …」

こどもが「生まれながらにハンディキャップがある」と知ったとき、ご両親はいったいどんなショックを受けるのでしょうか。それは私たちの想像以上のことであるにちがいありません。お二人にそのことからお聞きしました。

Aさんは、バック氏の文の『身体の中で絶望的に血が流れだすような感じだった』という箇所が、お子さんに知的ハンディキャップがあることを知らされたときの自分の気持ちを適切に表しているとおっしゃいました。そして、「自分の人生がこの子にさらわれていくのではないだろうか」、「この子の、そして私の人生はこれからどうなるのだろう …」と思ったそうです。

私たちは日常生活の中でハンディキャップがある方を街中で見かけたり、たまたま電車やバスに乗ったとき一緒だったりする機会があります。「かわいそうに …」、「親御さんもたいへんだろうな …」などと思った経験がある方もいらっしゃるはず。いわゆる「<sup>ひとごと</sup>他人事」として同情する

ことはあっても、自分や家族にそのような状況が起こるとはなかなか想定できません。その立場になって考えることもできません。

Aさんは続けます。「とても怖い予感がしました。先のことがまったく読めず、わからないからこそその恐怖というのでしょうか …」。子どもへの接し方、この子の将来、これからの家族の在り方、世間の目、因果応報的なことを言い出す人が出てくるのでは …。いろいろなことが頭の中を駆けめぐったことでしょう。「この子がいなかったら …」、「この子がいなくなれば …」という感情も抱いたこともあったとお聞きし、抱えこんだ悩みの大きさに返す言葉を失いました。

Bさんのお子さんは「ダウン症」と診断されました。医師から「このお子さんはダウン症候群です」と伝えられても、ダウン症とは何であるかご存知なかったといいます。こまかい説明を聞いたあと、「泣きながら家に帰り、お祝いに来てくれた人には言えなかった」ということでした。幼稚園に通うようになって、お子さんの言動が自分たちとはちがうことに気づいた子どもたちから質問されても「病気なんだよね」と言い、引け目を感じて「隠したい気持ち」があったそうです。また、お子さんを外に連れて行くと、冷たい視線でジロッと見られているような気がして、こだわりなく外出するには時間がかかったということでした。

### 「新しい出発」を促してくれた人たち

「ハンディのある子どもをどう受け入れていくか」— 新たな課題がでできます。幸いにもお二人には励まし、支えてくれた人たちがいました。「ことばの教室」や特別支援学級の保護者の方々から、「先輩」として「こうするといいよ」とアドバイスをもらったり、情報交換をして知識が広がったことがお子さんを理解するうえで大きな力になったそうです。放課後、「〇〇ちゃんはきょう、どうだった？」と聞くと、同じハンディがある友だちが「〇〇ちゃん、こうだったよ！」と、いいこと・わるいこと、みんな教えてくれたといいます。子どもたちに「声かけ」することによって、自分の子を「みんなが認めてくれているよろこび」を味わえたのでした。

がんばっている子どもたちや、子どものために時間を差しだし、一緒に歩んでいるお母さんたちと接することによって、同じ悩みを共有し、ともに考えることができる場が与えられ、少しずつ「自分が変わっていく」経験をすることができたのでした。お母さんたち(もちろん、お父さんや兄弟姉妹も)が変わること、それが子どもたちに安心感をもたせ、子どももそれに応えるように成長していくのですね。

### 「きのうの〇〇くん」より「きょうの〇〇くん」

バック氏の文について、お二人が「これはチョットちがうかな …」とおっしゃった箇所がありました。『この可憐な魂に無理をさせて、できないことをさせて、いったい何の役に立っているのか …』、『彼女のあるがままをそのまま受けいれ、それ以上のことはいっさい期待しまいと心に誓った』というところです。

「私は『彼女のあるがままをそのまま受けいれ』という心境まではまだ到達していなかったと思いますが、『それ以上のことはいっさい期待しまい』というのは、ちょっとちがうかなと思います」とAさん。「あるがままを受けいれることは大切ですが、自分の意思、〈～がしたい〉という自分の気持ちを話せたり、書けるようになってほしい。ひらがなやカタカナ、かんたんな漢字を覚えれば、絵本や新聞(テレビ欄など)を自分で読めるのでは … と思いました。生きていくうえで必要なことばや文字、数字はすこしでも身につけさせたいと願いました」。その際、「ゆっくり・いそがな

くてもいい」という態度で対応し、ぜったい「ほかの子とくらべない」ように心がけたそうです。「きのうの〇〇くんより、きょうの〇〇くん — と言ったらいいのでしょうか。期待をかけすぎず、もしかしたらできるようになるかもしれないという気持ちがありました」。

当時、お子さんたちが通学していた中学校には子どもたちに「自立」する力をつけたいという方針があり、そのひとつとして自転車通学の生徒も「一人で登下校できるようになる」という目標がありました。AさんもBさんも、子どもたちが通学するときは物陰に隠れてようすを見ていたそうです。「何とか道に迷わず着いてほしい。交通事故に遭わないで無事に行ってほしい。変な人に誘われないでほしい」—。子どもたち以上にハラハラ・ドキドキの中学校3年間だったでしょう。お二人の「可能性があれば、チャレンジさせたい」という勇断に、見事にお子さんが応えたのでした。「今できることに満足するだけではなく、子どもが持っている可能性を信じるのが大切さなのではないでしょうか」と、Bさん。『それ以上のことはいっさい期待しまい…』では、せつかくの可能性をつぶしてしまいます。お二人が「自分の時間」を差しだして返ってきたご褒美は、むずかしいことに挑戦した子供たちのたくましく成長した姿だったのです。

### 『天国の特別な子供』

エドナ・マシミラ

会議が開かれました。地球からはるか遠くで。  
「また次の赤ちゃん誕生の時間ですよ。  
天においでになる神さまに向かって、天使たちは  
言いました。

「この子は特別な赤ちゃんで、たくさんの愛情が必要でしょう。この子の成長はとてもゆっくりに見えるかもしれませんが。だから、この子は下界で会う人々に、とくに気をつけてもらわなければならないのです。

もしかして、この子の思うことは、なかなか分かってもらえないかもしれません。何をやっても、うまくいかないかもしれません。ですから私たちは、この子がどこに生まれるか、注意深く選ばなければならないのです。

この子の生涯がしあわせなものとなるように、どうぞ神さま、この子のための素晴らしい両親をさがしてあげてください。神様のために特別な任務をひきうけてくれるような両親を。

その二人は、すぐには気がつかないかもしれませんが。彼ら二人が自分たちに求められている特別な役割を。けれども、天から授けられたこの子によって、ますます強い信仰と豊かな愛をいただくようになることでしょう。

やがて二人は、自分たちに与えられた特別の神の思召しをさとるようになるでしょう。神からおくられたこの子を育てることによって、柔和でおだやかなこの尊い授かりものこそ、天から授かった特別なこどもであることを。」

### 「私が〇〇をえらんだのかな？」

次に読んでいただいたのが左の詩です。アメリカのペンシルベニア州にあるマクガイア・ホームというハンディがある子どもたちを治療する施設のシスター(修道女)が書いたものです。まずお読みください。

この詩はお二人ともすでにお読みになったことがあったそうです。「ハンディがあるいのちの誕生」についての詩です。天使たちは「特別な赤ちゃん」が生きていくには、「特別な任務」を引き受けてくれる「素晴らしい両親」が必要で、その二人を神さまにさがしてほしいと祈ります。そして選ばれた両親はいくつもの壁を乗り越え、自分たちが「特別な役割」を与えられたことに気づき、強い信仰と豊かな愛を抱くようになる — という、キリスト教信仰に基づいたものです。これをお二人はどのように受けとったのでしょうか。

子育て中にお読みになったAさんは涙ながらにお読みになったそうです。そして今、これまでの日々をふり返ると「この子がいなかった人生と、この子がいたからこそこの〈二つの人生〉が考えられます。私はこの子がいたおかげで、〈人生のいろどり〉がちがったと思っています」とおっしゃいました。〇〇くんにはお姉さんがいます。お姉さんによっ

て出会えた世界や友だち、そして〇〇くんがいたからこそ巡り合えた世界や仲間がいた人生は、そのいろどりをより多彩にしてくれて、「母親二人分の人生」をいただいたのでは — と受けとめていらっしゃるのです。Bさんも「神さまが親を選んで … とありますが、『あの家<sup>うち</sup>だったら大丈夫だよ』って、神さまが〇〇を我が家<sup>うち</sup>に送ってくれたのかもしれませんがね」、「この子のおかげで元気をもらいつつ、まだ働かせてもらっているんですよ」とおっしゃっていました。

そして、わたしにとって驚くべきひと言がAさんから発せられました。「逆に、私が〇〇を選んだのかな、なんて思うんです。」！ さらに「それまで見えなかったものが見えてきました。人生の風景がちがってきたのです」とも。この境地に至るまでに、どれほど多く悩み、どんなにたくさんの涙を流し、出口が見つからないかもしれない不安と深い絶望感に陥ったことでしょう …。

### 「長い旅をしてきました …」

25年ほど前、わたしは神奈川県横須賀市にある国立特殊教育(現在は「特別支援教育」)総合研究所に3か月の短期研修に行きました。「言語・難聴教育」のグループだったのですが、さまざまなハンディについての勉強もありました。講義の中に「心理学」もあり、ハンディがあるお子さんをもった保護者の方々の心理が、段階的にどう変化していくかについて話がありました。

思いもよらぬ医師からの告知を受ける → 大きなショックを受け、取り乱す。 → 「なぜ、私にこのようなことが、なぜ、今この時に起こるのか」と問いつづける。 → 「なぜ？」に答が出ないまま、焦燥感が怒りに変わるが、その中にも答がないことに気づく。 → 疲れ果て虚しさを感じ、諦めに移行する …。どなたもこのような経験をされるといいます。この「虚しさやあきらめから、どう立ち直るか」がその後のお子さんやご両親、ご家族にとって大きな問題になります。AさんとBさんが「なぜ、この子が …」という予想もしなかった現実を乗り越えられたのは、たくさんの出会いがあり、ありのままのお子さんを受け入れていったからでした。「でも、長い旅をしてきたなと思いますね」とAさん。そのひと言は、お二人のこれまでのご苦勞を身にしみて感じると同時に、〇〇くんと〇〇さんを授かった「恵み」への「感謝のことば」にも聞こえました。

今回は、お二人が経験なさった「絶望」から「感謝」へ — という「大逆転ドラマ」がなぜ起こったのかをもうすこし深く考えていこうと思います。そしてイエスは、この「なぜ？」について何を語っているのかをみていきます。

神さま、私たちが住むこの世界は「神さまのご計画に基づいて動いている」と書かれている本がたくさんあります。自分のこれまでの人生を考えると「たしかに、そう言えるよなあ」と思います。でも、「こんなことが起こるのも、神さまのご計画の一つなんだろうか？」なんて考えこむ出来事が世の中には山ほどあります。信仰において「未熟者」のわたしにあなたの真理を「やさしく・ふかく」教えてください。

(2018.05.25)

### 【引用・参考にした書籍など】

- ・エドナ・マシミラ 『天国の特別な子供』 (インターネットの複数サイトを参考にしました。)
- ・伊藤隆二 『愛と幸福と教育と』 伊藤隆二教育著作集2 (福村出版、1995)
- ・伊藤隆二 『なぜ この子らは世の光 なのか — 真実の人生を生きるために』 (樹心社、1995)
- ・山浦玄嗣 『ガリラヤのイエシュー』 ・新共同訳 『聖書』